

審査の結果の要旨

氏名 岩田 一正

本研究は、明治後期から昭和初期までの教育問題がどのように構成されていたかを、教育メディア空間の動態に注目して描き出そうとしたものである。当該時期の教育メディアに関する先行研究は、第一に教育ジャーナルのみに焦点をあててその特徴を分析しており、第二にメディアの特徴と政治・社会との関連を分析しそこなってきた。それに対して本研究は、当該時期において教育に関心を寄せる人々の日常に影響を及ぼす意味空間の編成に着目し、その意味空間への教育メディアの関与が増大していることを踏まえて、教育メディア空間の特徴とその再編成を初めて分析の対象としている。

本論文は、序章、八章からなる本論、終章の全十章から構成されている。序章では、国民教育に関する問題の発生と拡張に対して教育メディア空間がどのような機能を果たしていたのかという課題を提示した上で、先行研究の検討と分析の枠組み、章構成が示されている。本論部分は1917年の臨時教育会議の前後で大きく分け、二部で構成している。

第一部は1890年代から1910年代の国民国家創出期の教育を扱っている。第一章では雑誌『少年世界』（博文館、1895年創刊）を、第二章では国語読本を、第三章では全国小学校成績品展覧会（1912年）を、第四章では、『万朝報』の報道が発端となった「小学校教師の学力問題」（1912年）の報道をそれぞれ検討した。これらの検討を通して、国民教育の確立期である1890年から1910年代においては、教育対象となる子どもを、独自の価値ある時期を過ごす存在として論じる問題構成が浮上したことを明らかにした。同時に、従来と同様に業績主義の文脈に位置づける問題構成も存在したこと、さらには教育問題は、教育という特異な領域を熟知する者のみが論じることができるとする、自律的な領域として教育の領域を意味づける問題構成が浮上していたことを明らかにすることになった。

続く第二部は、戦前期日本が帝国としての相貌を整える1910年代後半から1930年前後までの教育を扱っている。第五章では、教師の殉職事件がどのように報道されたのか、第六章では学制頒布50年記念祝典（1922年）を、第七章では新中間層による新たな郊外住宅地における教育問題を、第八章では早稲田大学同盟休校（1930年）を、それぞれ取り上げている。第二部を通して浮き彫りにされるのは、当該時期は、国家の基盤となる領域として教育を位置づける問題構成が発生し拡張し、国民教育の再編期を迎える1930年頃には、教育と国家との強固な繋がりを自明化して教育に関する問題を構成していく筋立てが現れた点である。

終章では、これまでの個別の章を整理するとともに、1890年代から1930年代における教育メディア空間の変遷が結論として整理されている。

本研究は、教育問題を構成する言説実践によって教育を巡る現実がどのように創出されたのかを様々な事例に則して描き出すと共に、教育メディア空間の問題構成の歴史的な変化を明らかにした点において、これまでの教育雑誌分析とは一線を画し、新たな教育メディア史研究の領野を切り開いている。また、丹念な資料調査を積み重ねる中で執筆されており、個別章の完成度の高さも審査員によって高く評価されることになった。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。